

# NEWSLETTER

No.5

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会報 第5号

(2006年2月)

- 内容 災害派遣について (横手道子)  
便利と不便? (吉井健一郎)  
インドネシア熱帯林の再生への研究を始めるまで (鈴木英治)  
平成17年度会員活動報告 (菊谷賢一, 水上惟文, 野田伸一, 帖佐理子, 野呂忠秀, 森川泰夫)  
平成16年度鹿児島県JICA派遣専門家連絡会総会報告 (大富 潤)  
鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

## 災害派遣について

看護師 横手道子

ニューズレターへの投稿依頼を深い考えもなく受けてしまい反省しきりです。何がお伝えできるかわかりませんが、1年前のことを思い出しながら書いてみようと思います。

国際緊急援助隊医療チーム(JMTDR)の出動依頼はいつも突然です。それは、JMTDRの出動命令が自然災害に自分の国だけで対応できない国からの依頼に応じる形で出されるからです。〇〇に政府援助決定。参加可能な方は連絡下さい、という旨のファックスがJICAから届くことから始まり、人選があり派遣決定した人にものみ連絡がきます。今夕決定の通知がきて、明朝9時には成田集合というパターンが多いので、鹿児島の私にはなかなか機会がありません。災害が大きく、活動が長期間に渡りそうだと判断されたら二次、三次の募集がかけられます。一次の派遣期間は2週間が基本です。二次、三次になると決定から出発までに時間の余裕があることが多く、私も行けます。行きまーすとファックスで参加意志を伝えます。

今回私はスマトラ沖の津波災害スリランカへの医療チーム二次隊に参加しました。12月の押しつまった時に一次隊は出発。その様子をテレビ

ニュースで見たり、現地の状況を知らせるニュースを見たりして落ちつかない正月をすごしていた3日の夕方に二次隊派遣が決定との連絡をいただきました。決定して成田に向かうまではアドレナリン過多の状態、ちょっと興奮してバタバタ進めてしまいましたが、集合場所の成田に近づくにつれ不安の方が大きくなってきます。大変なことに足を踏み込んでしまった、私でいいのかなー、といった不安です。しかし、待合室でメンバーと顔合わせ話をしているうちに少しずつ落ちつき、団長以下22名で出発しました。シンガポールで乗り換えてコロンボへ、これで1日終わり。コロンボのホテルで5時間ほど休んで翌朝5時にはバスに





乗り込みスリランカを横断する形で夕方17時すぎ目的のアンパーラに着く。スリランカの自然は緑濃く豊かで国が安定していたらどんなにか住みやすい、暮らしやすいところだろうかと思われました。

結局現地に入るまでに2日間を要し、3日目にして始めて診療開始です。サイトは津波災害を免れた地域の小学校の校庭にテントを張り、又校舎の一部も借りて設定されていました。学校は災害のため家を失った人々に開放されており授業はお休みとなっていました。診療は、物が充分にない状況で行うだけで普段と同じです。津波から逃げる時に受けた外傷に加え、二次隊になると慢性疾患の患者さん、不定愁訴など内科的メンタル面での援助の必要と思われる人々の受診があり、患者数は150~200弱。これを3班に分けて診療しました。

宿泊はサイトとは離れた所に軍の建物を提供していただきテント生活から免れました。幸運で

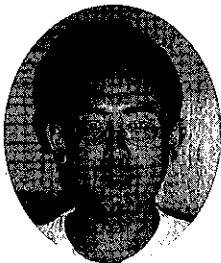
す。ガランとした大教室のような部屋を布で二つに仕切り総勢40名近くの合宿生活です。現地のスタッフ、通訳、運転手などもいっしょです。食事は近くの家で朝夕作っていただき今回は食事当番も免れました。食事は全てカレー味、さすがに1週間過ぎる頃には日本の食事が恋しくなりました。普段の自分が当たり前と思っている生活がどんなに恵まれた状況かとしみじみ感じました。

田舎の病院で目の前の患者さんの世話に明け暮れている自分から一時期でも逃げ出したいと不純な動機で登録したJMTDRでしたが、2回の参加で多くの出会いをいただきました。それは人との出会いだけではなく考える機会もいただいたと考えています。今回は又、帰国後緒方貞子さんと会う機会もいただき私の心の宝物となりました。これらの体験をどう生かしてゆけば良いのか未だに道の見えない私ですが、隣人に目を向けること、隣人に関心をもつことがまず一歩と思えます。



## 便利と不便？

JICA派遣専門家 吉井健一郎



今回初めて寄稿させていただきました。鹿児島市は中山町出身の吉井と申します。

JICAの技術協力専門家になりたくて鹿児島県庁を退職してから3月で早9年を迎えようとしています。上司や同僚には大変な迷惑をおかけしてしまいましたが、今もって応援いただいております。有り難くて言葉もない次第です。

これまでに青年海外協力隊員としてセネガル、

JICA専門家としてコートジボワール、エジプトで活動させていただきました。現在はカンボジア第2の都市バタンバンで営農を担当させていただいております。ポルポト派がその最後の抵抗の拠点としたバタンバンにはそこら中に地雷が埋設してあったそうです。今でも「あまり人里はなれたところへは入っていきな」と農家さんから言われます。時々、足を失った方を見かけます。私のカンボジア人同僚のお父様はポルポト派「肅清」の

被害者です。しかし、この生まれ変わった若い国の同僚や農家さんは早朝から夕方まで精一杯働く事を厭いません。隣国のタイやベトナムに近い将来、きっと追いつくでしょう。もちろん日本にも。しかも、彼らは生活の楽しみ方をよく知っているように思います。学ぶべき事の多いこと…。



エジプトの同僚と（筆者下左）



カンボジアの同僚と農家さん

さて、海外で便利さを痛感する物の代表はなんといってもパソコンです。私がセネガルに行っていた1997年から99年の間に猛烈に普及したようです。帰国してから皆がe-mailを使い、携帯電話を鳴らしているのにはまさに今浦島の感がありました。慌てて購入して四苦八苦したものです。逆に海外生活当初に不便を感じたのはバイク、車、電化製品等の故障でした。もちろん停電も含めて。なんでこんなに頻繁に故障するものかな？と、修

理を頼むたびに「途上国」に生活していることを痛感したものです。ところが、最近は…？実は今現在パソコンの電源接触が悪いというだけで非常に困っています。この稿を書きながらも通電が時々途絶えてしまうのです。早速、バッテリーコードを買いに街に行ってみました。無いんです。私の使用しているメーカーの機種に合うものが無いんです。プノンベンの家電店にも電話してみました。でも、無いんです。そしてそれは"修理"ができないのです。困っています。"買い替え"しかできない物とは実は非常に不便なものなのです。買い換えれば良い、という社会は一步その環境を離れると途端にその便利さを失うものなのです。

逆に、上記で不便だと感じていた物達はどこでも修理できるのです。セネガルで頻繁に故障していたバイクを、掘っ立て小屋のバイク修理屋のおじさんはどこかで拾ってきたようなあり合わせの部品を「これでもない、あれでもない」とぶつぶつ言いながらも見事に直してくれるのです。停電だってそうです。雨が降れば停電でしたが、朝にはしっかり直っているのです。便利と不便が多少の時間がかかる事を我慢すれば"現地で修理できる"という点において見事にひっくり返ってしまったのです。そうなのです。バタンバンで周りを見渡すと中古の電化製品が大量に出回っているのです。ほとんどは日本製です。CDラジカセ、洗濯機、冷蔵庫などなど。日本で捨てられたものがここで修理されて再生しているのです。今私の横で鳴っているCDラジカセもそうなのです。わずか20ドルで購入したのです。ついでに私の作業着も一部の普段着もこっちで買った古着なんです。なんだか、書きながら興奮してきました。これは杯を舐めながら本稿を書いているせいだけではないのです（失礼）。

ヨーロッパもアメリカもいいでしょう。でも、私が生活した国々にも来てみませんか？皆様それぞれの視点から日本が見えてきますよ。

# インドネシア熱帯林の再生への研究を始めるまで

鹿児島大学理学部 鈴木英治

インドネシア、マレーシア、ブルネイにはJICAの生物多様性保全プロジェクトの短期専門家として5回行った、1982年以来約40回行っては帰ってくるという生活を続けています。今年度からは3年間の予定で環境省の地球環境研究総合推進費を「森林-土壌相互作用系の回復と熱帯林生態系の再生に関する研究」というテーマで支給され、インドネシアの東カリマンタンを中心として出かけることになりました。鹿児島大学からは理学部の鈴木英治、阿部美紀子、内海俊樹、相場慎一郎、農学部米田健、教育学部久保田康裕の6名で、他に東大3名、森林総合研究所2名、国立環境研1名が参加しています。今回はその研究そのものより、鹿児島大で始めるようになった経緯を書いてみます。最近では研究費の多くが競争的資金になっていますが、環境省の予算も同じで簡単には取れません。そのような話に触れる機会はあまりないと思いますので、ここで紹介してみよう。

最初の出発点は1997-1998年にインドネシアを中心として熱帯林に広がった大きな山火事災害でした。私もその時には中央カリマンタンにいて、煙で飛行機が飛ばずに苦労しました。山火事後の対策のために2001-2002年に同じ環境省による推進費で「森林火災による自然資源への影響とその回復の評価に関する研究」が国立環境研の研究者を中心に行われました。その研究と鹿児島大学は関係ありませんでしたが、卒業生がメンバーであったり、関係者に知人がいたので、この研究を継続するために2003年度から新たな申請をする際に、代表者になるように12月初め鈴木へ依頼がありました。この年は1月6日が申請書締め切りだったのですが、12月29日までマレーシアに10日間学生実習に行っており、市川先生と学生20人近くを引き連れクリスマスの日にはボルネオの山中を(文字通り)さまよい歩いていました。年末に帰ってから正月返上で申請書を作りました。結局は事情をよく知った環境研の人に大部分を作ってもらった急ごしらえの申請書でしたが、書類だけの一次審査は何とか合格となり2月に東京で行わ

れた二次審査会に望みました。15分の講演ですが、2日前から東京に行って東京方面にいる研究分担者と打ち合わせて発表資料を作りました。私が学生の頃から有名な先生であった数人の元生態学会会長や現会長も含まれている約15名の審査委員の前で、1億円前後の予算をかけて講演するのは、自分が4年生の時に卒業研究の発表をした時以来の緊張感でした。しかし、二次審査で落選となりました。私達に関係している“(5)自然資源の劣化”分野だけで、毎年20件近くの応募があり、一次審査には5-6件通り、最終的に2-3件が認められます。

この年は申請を決めたのが12月始めで準備不足でしたから、2004年度には十分時間をかけて再度挑戦することになりました。1年の間に熊本と東京で打ち合わせ会議を持ち、時間的な余裕があるはずでも申請書提出前日にはほとんど徹夜状態になりましたが、一次審査は問題なく通りました。二次審査のためにも数日前から研究分担者のいる大阪と東京に行って打ち合わせをして、東京のホテルに2日間閉じこもって15分の講演のために読めばよいだけの原稿を作り、完全に暗記するまで繰り返し練習して、前年とほとんど同じ審査委員の前で説明をしました。二次審査の説明も15分の時間通りピタリと終り、あとに続く10分の質疑応答もまずまずで、かなりよい感触であったのですが、最終的には認められるまでには至りませんでした。なお、打ち合わせのための旅費とか、二次審査参加旅費はどこからも出してもらえません。



東カリマンタン・ブキットバンキライの調査地で

2度ダメだったのでもう諦めようという気持ちにもなりかけましたが、あと一歩だったという話も伝わってきてもう一度やってみようかということになり、2005年度も挑戦することにしました。この年から1サブテーマ1研究機関に限るといった新たな条件が加わり、前年からは大幅にメンバーを入れ替え申請書を作り直さなければならなかったのですが、再び一次審査を通過できました。この冬に開設したばかりの東京の田町駅前にある鹿児島大学リエゾンオフィスを使わせてもらいながら、東京でも最後の仕上げの準備をしました。ちょうど2月末の大学入試の日で、2浪の学生が再々度入学試験に臨むときはこんな気持ちかと思いながら審査会場に出かけました。緊張しながら自分の順番を待つ間に出会う前後の発表者とは皆知り合いです。自分の案が採用されれば彼の案はおそらく不採用、その逆も十分に起こりえると互いに心中で思いながら挨拶をするのは複雑な心境でした。15分の説明後の質疑では厳しい意見が多く、印象としては今年もダメだったかと思いつつ、鹿児島に帰ってきました。ところが数日後二次審査を通過したという連絡を頂き、正直驚きました。

その後は、詳細な予算案作り、インドネシアへの調査許可申請、予備調査、本調査と1年間めまぐるしく過ぎていきました。9～10月には日本人18名、インドネシア人16名が参加する調査を東カリマンタンのブキットバンキライという場所で行いました。西スマトラのパダンでは農学部の米田さんが中心となって日本人4名、インドネシア人2名による調査が同時に進められました。今回の研究の特色は植物—土壤—微生物の間の相互作用に注目して、森林再生を考えようという点にあります。そのためフィールドワークに比較的なれている植物生態研究者だけではなく、普段は実験室から出ることの少ない微生物関係の研究者の方にも多く参加して頂いています。宿舎などの条件がカリマンタンとしては非常によく、大人数の割には体調を崩す人も出ないで無事に本調査を終えることができました。私としても異分野の人と共同研究を実施した経験は、結構刺激的でした。1月にはインドネシアの研究者が3名鹿児島を訪れ共同研究を進めています。あと2年続く計画ですが、森林再生のような年数のかかる研究を進めるには3年という期間もあつという間に過ぎてしまいそうな予感がしています。

## 平成17年度会員活動報告

### 「活動報告」

(株)国際水産技術開発 菊谷賢一

1992年から2000年まで従事させていただいたトンガ王国水産養殖プロジェクト (JICA) 終了後、引き続き2年間のフォローアップ業務を担当し、10年間にわたるトンガ専門家派遣を2002年12月に終え帰国しました。翌年 (2003年) 2月からは海外漁業協力財団 (OFCE) の環礁内資源管理支援プロジェクト (対象種: シャコガイ) 担当の専門家としてミクロネシア連邦政府経済省に2年間派遣されました。ミクロネシア国ではその歴史的・地理的背景から達者な日本語を話すお年寄りや親日家が多い一方、先進国の文化・風潮の影響による食習慣や生活スタイルの変化がみられ、古来より島民の健康と生活を支えてきた魚食文化や

沿岸水産資源活用などの伝統的な習慣・技術が軽んじられる傾向にあります。かつて豊富であったシャコガイもそのような状況下において近年激減しており、このプロジェクトでは現状の調査や必要な資源保護の実施、資源管理技術や活用技術の移転などの協力活動を行いました。

昨年3月の帰国後は、4月にバヌアツ共和国「豊かな前浜プロジェクト (JICA)」の事前調査団員および8月に実施協議調査団員としてバヌアツ国を訪れ、現在は同プロジェクト開始に係る諸準備を行っております。これまで同国にはヤコウガイやタカセガイの種苗生産や資源管理に係る調査等で数回訪れたことがありますが、今回の

業務はそのヤコウガイ、タカセガイ、シャコガイなどサンゴ礁域における重要な水産資源の増養殖と資源管理を目指すものです。2006年3月6日からの3年間は、このプロジェクトのチーフアドバイザー及び増養殖専門家としてバヌアツ共和国に赴任します。南太平洋の美しい自然と大切な海洋資源を次世代へ伝える要となるこの新しいプロ

ジェクトの立ち上げにあたり、心を引き締めて全力で取り組む覚悟でおります。

これまで定例総会の開催時期に派遣が重なり、残念ながらまだ一度も参加させていただく機会がありませんが、今後とも変わらぬご支援ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

## 「活動報告」

鹿児島大学医学部保健学科 水上惟文

自己紹介 私は1980年5月から1981年12月までの1年半、アフリカのガーナ共和国ガーナ大学野口記念研究所へ寄生虫学の専門家として派遣されました。野口記念研究所は野口英世博士が黄熱病の研究で亡くなられたのを記念して、JICAの無償協力でガーナ大学構内に新たに建てられたもので、私達は野口研第一次前半チームでした。

現在、私は鹿児島大学医学部保健学科地域看護・看護情報学講座に所属しています。研究は、糞線虫症の疫学的研究、糞線虫の形質転換に関する研究、ハブ毒抗毒素とその中和機構、ハブ毒による筋壊死の発現機構、海洋深層水の効果などのテーマで、保健学科卒論の学生と一緒にしています。教育は、共通教育で、生命科学基礎、教養生物学、寄生生物学、学部では、生命と細胞、卒業研究、大学院修士課程では、熱帯圏医療学特論、特別研究、等々を担当しています。

近況報告 平成17年度は、他の機関との共同研究が増えてきた年で、8月には奄美大島龍郷町役場の協力で龍郷町大勝地区の糞線虫症の調査を行うことができました。9月からは富山の五洲薬品と海洋深層水の効果に関する研究を始めた。12月には加計呂麻診療所と共同で加計呂麻島芝地区の糞線虫

症の調査を行うことができた。また、平成17年2月5日、鹿児島県大島郡与論町において、平成16年度文部科学省地域貢献特別支援事業の一環として、鹿児島県保健福祉部次長、ならびに、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科・医学部の6名の教員を講師に、公開シンポジウム「奄美長寿とアイランド・セラピー」が、鹿児島県と与論町の後援の下に開催することができた。このように、本年度は、自分の実験室での自分自身のテーマによる実験研究以外に、地域に深く関わる仕事を行うことができ、有意義な一年であった。

活動報告 活動報告として書くほどの事でもありませんが、私は鹿児島大学の共通教育（旧教養部）で、寄生生物学の講義を後期に行っています。現在、受講生は300名程ですが、その中で、以前南日本新聞に投稿した6回連載のガーナに関する記事を紹介しています。若い学生の諸君が少しでも国際協力に興味を持ってくれたらとの願いで毎年やっています。

また、11月14日には、鹿児島大学医学部保健学科教育棟において、JICA応募推進員のサナプリア智子さんを講師に青年海外協力隊応募説明会を開催した。

## 「近況・活動報告」

鹿児島大学多島圏研究センター 野田伸一

昨年は海外で活動する機会が3回ありました。2月にはフィジーにある南太平洋大学を訪問しました。目的は鹿児島大学との学術交流協定の推進・発展で、学長、海洋科学科長、それに鹿児島大学多島圏研究センターの外国人客員研究員であった3人の友人に会うことでした。今後のフィールドにする予定の村も訪ねました。フィジーまでの久しぶりの長時間のフライトは少しばかり苦痛なものでした。隣に座ったドイツのおばさんはヨーロッパから12時間、さらにフィジーまで10時間とのこと、あなたはまだまだよと励まされました。

7月には韓国海洋研究所を訪問しました。私が所属している鹿児島大学多島圏研究センターはアジア太平洋の多島域を対象とする学際的地域研究センターで、研究活動を通じて、学際的地域研究、学術の国際交流、対象地域の福祉発展を目的としています。韓国海洋研究所はミクロネシア連邦のチュックに研究支所を持っており、チュックでの共同研究を実現させることが目的でした。我々の訪問を歓迎してくれ、8月には1名が韓国海洋研究所のメンバーに同行してチュックで共同研究を行い、今年1月には2名がチュックを訪れ、今後の研究の展開のための情報収集を行いました。

11月にはベトナムのハノイにあるマラリア寄生

虫病害動物研究を共同研究のために訪問しました。ここ数年、ベトナムのハノイ近郊の村で回虫や鞭虫などの腸管寄生虫の伝播経路に関する研究を続けています。これまで調査を続けてきた村が都市化したために、ハノイから約40kmにあるMai Trung共同体をあらたな調査地にし、小学生の寄生虫検査と駆虫を実施しました。今後、再感染がどのように起こるのかを追跡する予定です。ベトナムを訪れるたびに感じるのはベトナム人のたくましさです。ホテルの前の通りにはバイクとクラクションの音があふれています。信じられないような大きな荷物を積んだバイクや自転車、一家4人が乗ったバイク、売り物を天秤棒で担いだ人などがめけていると飽きることがありません。



《写真説明》Mai Trung共同体の小学校で共同研究者Dr. Hoaと撮影。

## 「近況報告・活動報告 および自己紹介」

若松記念病院理事長・内科医 帖佐理子

### 自己紹介

1992年にラオス国へJICA専門家の夫を訪ねたことがきっかけで、NGO「じゃっど」を立ち上げた。ラオス国の医師たちと共に、全国200名余の会員の支援をうけ、ラオス国の学校保健援助をしている。

2005年、NPO認定を受けた。現在理事長は小幡順子。帖佐は事務局長。

JICA派遣：ヴェトナム リプロダクティブヘルス病院管理

1997年12月12日～1998年1月31日

1998年6月16日～1998年7月6日

1998年12月4日～1998年12月20日

1999年7月6日～1999年7月22日

現職：医療法人大誠会 若松記念病院 理事長  
内科医（糖尿病専門医）  
特定非営利活動法人 ジャっど 事務局長

#### 平成17年度の活動

JICAカウンターパート研修受け入れ「ヴェトナム リプロダクティブヘルス」

- ① 平成17年1月27日 若松記念病院にヴェトナム、ゲアン省から10名（計画投資省1名、保健省ほか医師7名、女性連合1名）の研修生を受け入れた。（病院管理、クライアント・フレンドリーサービスについて）
- ② 平成18年2月23日（予定）

“ジャっど”の活動を始めてもう13年になります。始まりは、夫がポリオ根絶の仕事で行っていたラオスに私が遊びに行った時でした。細々と、ラオス人の友人たちと続けています。ラオスの保健に関わっているうちに、JOICFPと知り合い、ヴェトナムに専門家（病院管理）として行くことになりました。その後、研修生の受入を続けてい

ます。活動を進める中、ラオス人の友人から学ぶものが多く、このまま素人であることに不安を持ちました。そこで1999年から1年間タイのMahidol大学の大学院で途上国の保健マネジメントを学びました。JICAから小規模開発パートナー事業として事業費を頂き、鉤虫対策プロジェクトを行いました。また、JICAのKIDSMILEプロジェクトの学校保健部分を実施担当いたしました。“ジャっど”が作成した「衛生の歌」は、ヴィエンチャンのラジオ、テレビから聞こえるほどになりました。子供たちが口ずさんでいるのを聞くこともあり、うれしいです。

また、若松記念病院には、16年8月から6ヶ月間、ラオスから看護師を1名受け入れました。鹿児島県が青年海外協力隊の推薦から選抜する、海外技術研修青年受入れ事業です。

国内では、大学祭などで広報を行う他、鹿児島大学、川内小学校、ソロプチミストなどで“ジャっど”について、途上国について、話しています。

### 「それでもフィリピン大好きです」

元フィリピン・マレーシア派遣JICA専門家・鹿児島大学水産学部教授 野呂忠秀

鹿児島大学水産学部附属海洋資源環境教育研究センター（海洋センター）で海藻の研究をしています。でも

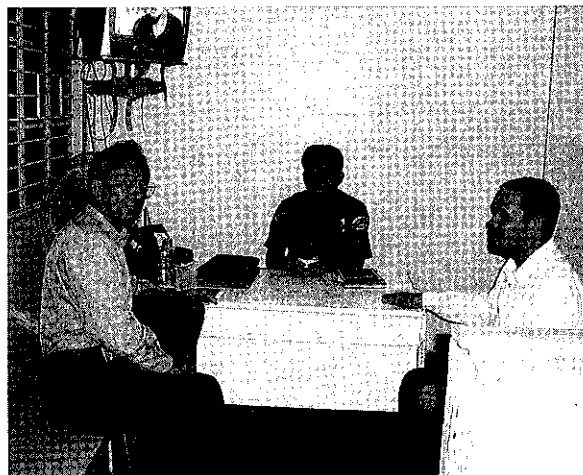
「自分で研究をしています」

と胸を張って言えない弱みがあります。学問とは無縁な会議や委員会や何やら訳の分からないことばかりしているからです。研究費をかき集めてきて、若い先生や大学院生に使ってもらうのも私の仕事です。しかし今仰せつまっているセンター長の役も今月で解かれるので、また天下晴れて一介の大学人として学生と海に潜り海外に出かけることができると今から楽しみにしています。

昨年夏のことでした。毎年恒例の「フィリピンに行きたい病」治療のため大学の同僚とマニラのホテルに泊まっていました。そこでフィリピン人の研究者を詐称する電話（フィリピン版振込め詐欺）に引っかかってマンマと2万円を取られて

しまいました。犯人は宿帳を調査したホテル内部の確信犯でしょう。

これまでに、海外で一度も犯罪に巻き込まれたことのないのが私の自慢でした。もちろん、警官



2005年8月マニラの警察で取り調べを受ける筆者（左）：「ワタシ、悪イコトシテナイヨ」



に駐車違反で賄賂を要求されるなど、不可抗力のトラブルは数限りなくありました。スピード違反で切符を切られたこともありました。でもそんなことでメゲてはJICA専門家の肩書きに傷がつくというもの。

この写真を見てください。マニラ首都圏マカティ市の警察署で警官（中央）に被害届けを出した折の記念写真です。左側に眼鏡をかけてカメラを

持っているのが日本人の私です。TPOにウルサイ私ですのでピースのポーズは差しひかえています。写真の右がホテルの副支配人。鉄格子の向こうでは、拘留中のフィリピン人が

「間抜けなお人好しの日本人もいたモンダ」と言いたげな顔をしてこちらをボンヤリ眺めていました。私も55歳にして焼きが回りました！

## 「活動報告」

元ホンジュラス国第7保健地域リプロダクティヘルス  
向上プロジェクト・フォローアップ短期専門家 森川泰夫

昨年6月末から3ヶ月間にわたってJICAの短期専門家として中米ホンジュラスで活動した。任地は首都テグシガルパから東へ車でおよそ2時間の距離にあるオランチョ県の県庁所在地フティカルパという地方都市であった。オランチョ県は人口約42万人が2万4千平方キロの面積で暮らすというから、鹿児島県の4分の1にも満たない人口が同県の約2.6倍の面積の土地に住むということになる。ホンジュラスは太平洋と大西洋側（カリブ海）に面した海岸線を持つが、オランチョ県には海はない。標高数百メートルの山々が続く内陸部にあたる。

当地滞在中、町の中心部から緩やかな坂を上りきったところにある「ボケロン・ホテル」が生活の拠点となった。ボケロンという名称は、フティカルパ近郊にある火山の名前に由来するもので、人々の話によれば、いつの頃かは定かでない（ほど昔）が、そのボケロン火山が大噴火を起こし、近隣住民の他地域への移住が余儀なくされたことがある、とのことだ。

オランチョ県内の主だった保健センターへ視察に赴くため、地図を眺める機会が多くなると、アグ

ア・カリエンテ（熱い水）という川の名前が目を捉えた。ローカルスタッフに確かめると、ホンジュラスには温泉があり温泉を利用したティラピア養殖も実施されているとのこと。昼食のビュッフェ式レストランでよく食べる白身魚がそれであったようだ。

ボケロン火山、温泉、泉熱利用のティラピア養殖と続けば、鹿児島を思い浮かべないわけにはいかない。サツマイモの原産は確かこの近辺だったか、八百屋でも立派なサツマイモが並んでいた。ではイモ焼酎はどうだろうか？ということ、いろいろな人に尋ねたところ、結論はあるらしい、ということになった。ただし市販されておらず一部の地域で自家消費用に醸造されている、との情報が最も確からしく思われた。今回の任期中はその地方を訪れることができなかった。次回ホンジュラスへ行く機会があれば、是非ホンジュラス・イモ焼酎？の探索に出かけたいものだ。もちろん鹿児島の焼酎を手土産に。

# 平成16年度鹿児島県JICA派遣専門家連絡会総会報告

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 幹事 大富 潤

平成17年3月5日(土)午後4時から、鹿児島市の「敬天閣」において平成16年度鹿児島県JICA派遣専門家連絡会総会が開催されました。参加者は会員19名、来賓1名、計20名でした。

最初に、市川敏弘会長より挨拶がありました。その中で、①私たちの海外経験を、特に若い人たちに直接伝えていこう、②国際交流に関係する他の団体とも交流・連携を深めていこう、という呼びかけがありました。つづいて、JICA九州国際センターの笠原秀昭所長代理、佐佐木健雄業務第二チーム長より、緒方貞子理事長就任後に掲げられたJICAの3つの方針(現場主義、効果効率性、迅速性)、組織の改変(部課長制の廃止とチーム制・グループ制の導入)等についての説明があり、JICAが変わりつつある時期にあることが強調されました。

ご来賓の紹介の後に議事に移り、まず平成16年度活動報告(NEWSLETTERの発行、会員名簿の整備、平成16年度会員活動報告冊子の作成、会員の経験を活用してもらうための活動、会員への九州ネットの送付)があり、議論の後承認されました。また、次年度より会員活動報告をNEWSLETTERに含めることも承認されました。会員の経験



懇親会

を活用してもらうための活動については、今年度に3件4回の要請に対して筆者(1回)、中畑勝見会員(2回)、東香代子会員(1回)が講師として派遣された旨の報告とともに、事前会議により実行委員会(委員長、児玉憲雄幹事)を立ち上げたことが報告され、承認されました。

今年度よりJICA国際協力推進員に就任された原奈美さんの挨拶、筆者による会計報告の後に平成17年度活動計画案について諮られ、会員活動報告を組み込んだNEWSLETTERを発行することが承認されました。また、会員名簿については個人情報保護法を視野に入れて慎重に議論され、氏名、派遣国、期間、市町村名までの住所のみを掲載した名簿を会員に配布し、従来のスタイルの名簿は事務局に置くことが承認されました。野田伸一前会長より当会とJICA国際協力推進員との関係(推進員の立場)について説明があり、確認が行われました。つづいて、実行委員会の児玉委員長よりこれまでの活動と今後の活動方針について報告があった後に閉会となりました。



総会



総会講演

総会の後には、JICA国際協力推進員として3年間ご活躍され、今回はご来賓としてお越しいただいた丸野里美様に「JICA国際協力推進員の退任にあたって」と題してご講演を賜りました。推進員として特に力を入れてこられたこと、「JICA鹿兒島デスク」という役割について、これからの抱負などを熱く語っていただいた後に、楽しいクイズで場を盛り上げていただきました。丸野様らしい、あたたかさ溢れるご講演でした。

午後6時からは懇親会が開かれ、今年度は会員のご家族の参加もみられました。例年と同様に活発な意見交換が行われ、会員相互の親睦がさらに深まったひとときでした。

現在の鹿兒島県JICA派遣専門家連絡会役員は下記のとおりです。

- |    |      |                           |
|----|------|---------------------------|
| 顧問 | 笠原秀昭 | 独立行政法人国際協力機構九州国際センター所長    |
| 会長 | 市川敏弘 | 鹿兒島大学理学部                  |
| 幹事 | 北 香理 | Festa TD代表・国分メンタルクリニック副院長 |
| 幹事 | 児玉憲雄 |                           |
| 幹事 | 志賀美英 | 鹿兒島大学法文学部                 |
| 幹事 | 大富 潤 | 鹿兒島大学水産学部                 |

# 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成15年2月28日)

## 1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び鹿児島県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識・エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

## 2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係わる事業を行う。

- (1)政府開発援助（ODA）進展動向に関する調査研究及び提言
- (2)JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3)鹿児島県と海外諸国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動
- (4)会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること

## 3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者。

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

## 4. 会長及び幹事

- (1)会の運営を円滑に行うため、当会に会長1名および世話役として幹事4名を置く。
- (2)会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3)幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当る。
- (4)会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5)本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6)本会に臨時会計役を定め、所定の会計処理をおこなう。

## 5. その他

この申し合わせ事項を改変、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、会員の過半数の同意（集会又は郵送による）を得て施行する。

## 編集後記

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報第5号をお届けします。

今年度から会員の自己紹介、近況報告、活動報告も会報に含めることにしました。皆様からのご投稿、ご意見をお待ちしています。

(事務局)

### 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報 第5号

発行 2006年2月

発行者 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会長 市川敏弘

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-35 鹿児島大学理学部

電話：099-285-8170(直通) Fax：099-259-4720

E-mail：ichikawa@sci.kagoshima-u.ac.jp